ISSN 1341-4046

埋文やまがた

1999年12月1日
第15号

寒河江市 高瀬山遺跡群ほか　東から望む

財団法人　山形県埋蔵文化財センター
YAMAGATA PREFECTURE ARCHAEOLOGY CENTER
〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番1号　TEL 023-672-5301㈹　FAX 023-672-5586

高瀬山遺跡群

はるかなる過去より，高瀬山あたりでは最上川の恵みを求めて人々が集いました。ふるくは旧石器時代にこの地をおとずれ，縄紋時代には川のほとりに住まい，古墳時代には権力者の古墳が築かれ，古代においては植民にともなういくつものムラが置かれました。しかし時が流れ，人々の生活の痕は土に埋もれていきました。いまハイウエイ建設にともなう発掘調査で明らかとなった高瀬山遺跡の遺産をみなさんと見ていきましょう。

◆高瀬山の歴史

高瀬山遺跡は山形盆地西部の寒河江市にあり，市街地の南1.5キロの最上川に接する高瀬山河岸段丘に立地します。標高122メートルを頂点とする南北に長い丘陵で，その南西の裾を最上川が洗う非常に見晴らしの良いところです。北西に雪を頂く月山，南西には蔵王山，西に朝日連邦の峰峰が望まれます。

この高瀬山のあたりは江戸時代まで松林でしたが，明治初年には開墾が進められ古墳の存在が注目されました。さらに大正年間にも十数基の古墳が確認されていたようです。なかでも県指定となった高瀬山古墳は1932年（昭和７）に，ブドウ畑をつくる開墾中に石の棺（石槨）が発見されました。これは直径18メートルの円墳で，石槨の中からは二振りの鉄剣が出土しました。ですから、はじめは高瀬山は古墳として知られるようになりました。

これまでおこなわれてきた市・県教育委員会の分布調査や発掘調査，1994年度から始まった東北横断自動車道関連の調査などで，高瀬山およびその一帯に遺跡が広がっていることが明らかになりました。東側から三条遺跡，高瀬山遺跡，落衣長者屋敷遺跡と名付けられましたが，これら遺跡は途切れることなく続いているようです。なお，高瀬山遺跡はハイウエイ関連の調査では１期，２期，SA（サービスエリア），HO（ハイウエイオアシス）の４地区に分けられました。遺跡の時期は旧石器時代から中世にいたるものですが，地域ごとにその時期は異なり複数の時代にまたがることがわかりました。

県指定史跡高瀬山古墳

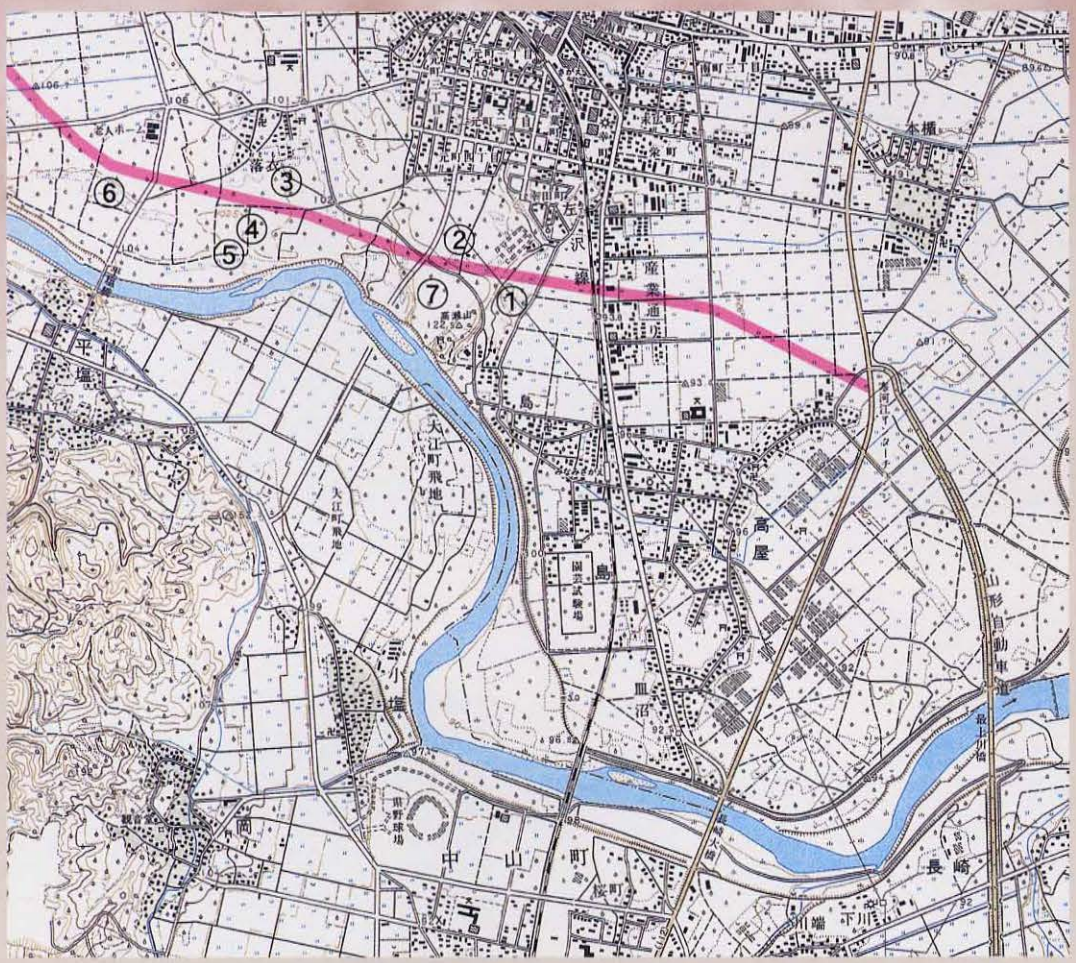
◆寒河江の地名

寒河江は古代律令下においては，はじめ最上郡として陸奥国に属していました。歴史書によれば和銅５年（712）９月に出羽国が創設され，同年10月に置賜郡とともに出羽国へ編入されたことが書かれています。このことから出羽国建設以前から中央の行政下に組み込まれていたことがわかります。

和銅５年以降，出羽国への移民の記録が数多く見られるようになり，最上郡にも多く移民がおこなわれたことが推測されます。そしてこのころ「寒河江」の地名も発生したようです。古代において河と川は，読み方をどちらも「加波」として区別していませんでした。寒河江の寒河を寒川とも書き，この地名は九州，中国，近畿，関東，岩城，羽後など20ヵ所ほどあります。寒河（寒川）ほかの地名（郷名）はいずれも関東地方の古い地名です。特に寒川は相模国（神奈川），下総国（千葉），下野国（栃木）などにあり，いずれも川と関係が深い地域で，稲作農業の先進地域であったようです。関東の寒川の民が寒河江に入植させられ，寒河江の地をはじめ寒川と称したことが推測されます。

（安部実）

を探る　発掘調査で見えた過去



この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の1/25,000地形図を複製したものです。（承認番号平11東複第608号）

1　三条遺跡
2　高瀬山遺跡１期地区
3　〃　２期地区
4　〃　SA（サービスエリア）地区
5　高瀬山遺跡HO（ハイウエイオアシス）地区
6　落衣長者屋敷遺跡
7　県指定史跡高瀬山古墳

高瀬山遺跡を走る東北横断自動車道

日本考古学年表

年代	時代区分		高瀬山遺跡群
60万年前	旧石器時代	前期	
13万年前		中国	
3万5000年前		後期	
3万年前			
2万5000年前			
B.C.11000	縄紋時代	草創期	
(1万3000年前)		早期	
B.C.4000 (6000年前)		前期	
B.C.3000 (5000年前)		中期	
B.C.2000 (4000年前)		後期	
B.C.1000 (3000年前)		晩期	
B.C.300 紀元前	弥生時代		
A.D.1 紀元後			
300	古墳時代		
400			
500			
600	飛鳥時代		
700	奈良時代		
800	平安時代		
900			
1000			
1100			
1200	鎌倉時代		
1300	南北朝時代		
1400	室町時代		
1500	安土桃山時代		
1600	江戸時代		
1700			
1800	近代現代		
1900			

ムラと生活の場

平安時代の
掘立柱建物跡群

住まい　竪穴と平地

高瀬山遺跡では縄紋時代から奈良・平安時代に営まれたムラの建物跡が約500棟も見つかりました。当時の住まいは，地表より下に床をもつものと地上に床をもつものとがあります。

地面を掘りくぼめた竪穴住居は縄紋時代から平安時代まで使われますが，平面の形は丸から四角へと変化します。また縄紋時代に作られていた石組みなどの炉は，古墳時代ころには姿を消し，カマドがその用途を兼ねるようになります。

掘立柱建物は地面に穴を掘り柱を据えたものです。奈良・平安時代には大型の建物や倉庫が立ち並んでいました。

このように住まいを中心としてムラが築かれました。生活にかかわる狩猟，採集，栽培，加工場などの跡がその周りで見つかっています。

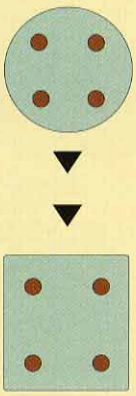
（鈴木徹）

住居の移り変わり

縄紋時代

古墳時代

奈良・平安時代



丸形の住居
（縄紋・弥生時代）

角形の住居
（古墳時代以降）

住居平面の形

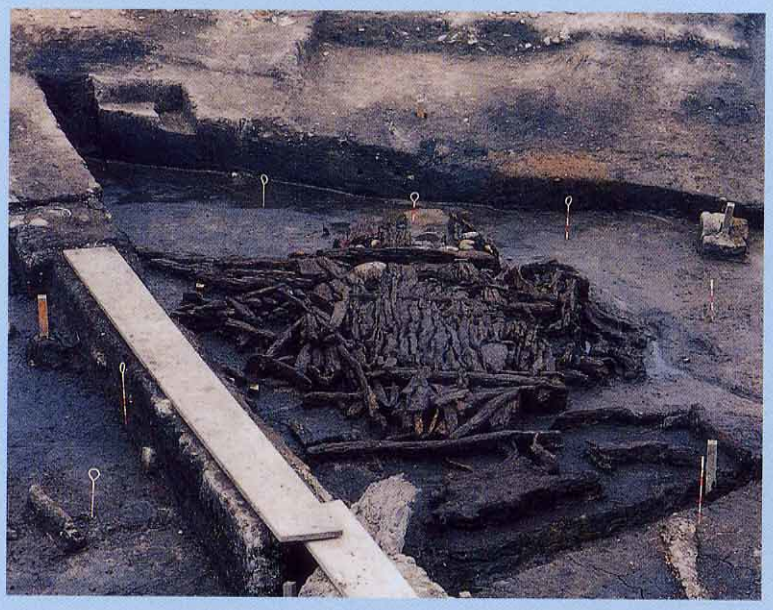
竪穴住居

平地住居（掘立柱建物）

落とし穴　狩猟

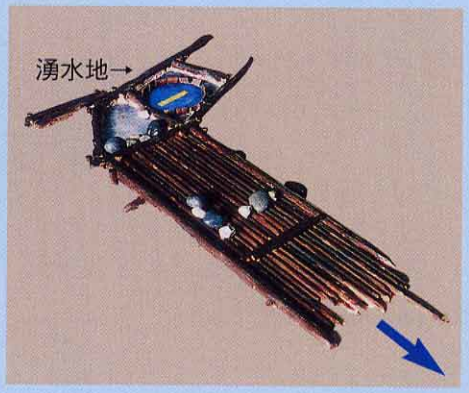
縄紋時代の狩猟のひとつに獣を捕らえる落とし穴があります。獣の通り道におもに仕掛けられたもので，長いものでは直線状に36基もならんで見つかりました。

水　場　食品加工



縄紋時代の後期から晩期にかけて使われた，木組みの水場が見つかりました。湧水があるところを選んで作られており，周囲からは食用とされたトチの実の皮が多量に出てきました。

トチの実は苦みが強く，そのままでは食用に適しません。水さらしや加熱処理のアク抜きが必要です。この水場では皮むきやアク抜きなどのため，水さらしがおこなわれたようです。



水場遺構の模型

上手の湧水地から水が湧き出て，矢印（→）方向へと水が流れる。石が置いてある足場上で，トチの実などをさらしたようです。

山の上の古墳群

古墳は高く土盛りした古墳時代の墓で，当時の豪族や有力者が競って造りました。古墳の形には円墳や方墳，これらを合わせたような形の前方後円墳などがあります。現在，山形県は前方後円墳や埴輪がある古墳の日本海側の北限となっています。古墳の存在で大和国家の勢力範囲がわかります。

発掘調査では高瀬山遺跡の東端，三条遺跡を見下ろす最上川河岸段丘から9基の古墳の跡が見つかりました。開墾により盛土が削られて平らな状態でしたが，周溝がはっきり残っていました。古墳の中央部には棺を納めたと思われる穴（石槨）もありました。円墳の大きさは直径10メートルのものから，35メートルのものまであり，埋葬された人の権力によって大きさも異なるようです。この段丘は山形盆地が一望できる見晴らしの良いところです。死後も一族の権威を示すように，領地を見渡せる山の上に古墳を築いたのでしょう。

ここから南西に約400メートルの場所には，県指定となっている高瀬山古墳があります。大正年間には当地一帯に十数基の古墳が確認されていたことから，調査区外に未発見の古墳がある可能性があります。

（須賀井新人）

古墳群検出状況　西から
段丘上に９基の古墳の周溝が確認されました。
丘の下には発掘調査中の三条遺跡が見えます。

古墳の裾には丸い溝が掘られており、
円墳だったことがわかります。

古墳群掘り下げ後の状況です。
一番手前に見えるのが方形周溝墓です。

川に残されしモノたちは？

三条遺跡

奈良・平安時代の集落を取り囲むように流れていた川跡

三条遺跡は高瀬山の東裾に広がる，日当たりの良い緩やかな斜面にあります。奈良・平安時代の集落を，南から東に取り囲むように流れていた川跡が見つかっています。

川の中からは，集落で使われていた土器や木製品が多量に出土しています。なかでも，墨で文字が書かれた土器が450点以上あり注目されます。「奉」や記号のような文字が多く含まれることから，川の周辺では普段とは異なる器の使い方をしていたことがうかがえます。

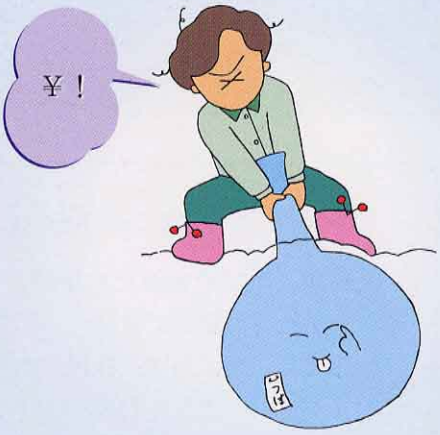
川底から出土した土器

川跡には粗い砂がたまっており，洪水があったことがわかります。川が氾濫して堆積した砂に護られて，奈良・平安時代の水田跡が集落の東に残されていました。水田跡では，当時の人々の足あとが確認できました。河川の氾濫は米づくりをする人々を困らせたことでしょうが，現代の私達に当時の様子を生々しく伝えてくれます。

（水戸弘美）

文字が書かれている土器

水田に残された足あと



寒河江市

平野山古窯跡群（ひらのやまこようしぐん）

窯跡の調査風景

庄内地方から高速道路を走ってくると，山形盆地がゆっくりと広がって見え始める斜面（しゃめん）があります。平野山古窯跡群は寒河江市の西部にあり，この南東に面した緩やかな斜面にあります。

平野山古窯跡群は，今から千年以上前の奈良・平安時代に営まれた窯業（ようぎょう）団地でした。発掘調査の結果，窯（かま）や工房（こうぼう），職人の生活した跡が確認されています。窯では，約1200度の高温で酸素を入れずに焼き上げる，青くてかたい須恵器（すえき）が焼かれていました。須恵器が焼かれる窯は，熱がうまくまわるように斜面につくられ，ワラが混ぜられた粘土で空気を遮断（しゃだん）する構造をもつ登窯（のぼりがま）と呼ばれるものです。平野山古窯跡群では，この登窯が，15以上見つかっています。窯前面に捨てられた焼き損じなどから，食器や貯蔵用のツボやカメ，硯（すずり），瓦（かわら）などがつくられていたことが分かります。

近年，奈良・平安時代の集落が平野山古窯跡群周辺で調査されていますが，集落跡から出土する須恵器の特徴から，平野山古窯跡産須恵器の大半は，周辺で生活する人々が使っていたことがわかります。

当時の職人達は，土器の原料に適した土，燃料となる豊富な薪（まき），窯を作りやすい斜面，製品を運び出しやすい場所などの条件を考えて，この平野山を須恵器生産の地に選んだと思われます。平野山古窯跡群に立つと，職人が土器づくりに精を出す光景が目に浮かび，登窯で勢いよく薪が燃える音が聞こえてくるようです。

（水戸弘美）

Illustration © Kurosaka Hiromi

平野山窯跡史跡記念碑

斜面に作られた窯

窯に残された須恵器

「埋文やまがた」の購読について

広報誌「埋文やまがた」購読ご希望の方は，当センター研究課まで電話にてお問い合わせ下さい。なお，郵送料はご負担いただきます。

電話 023(672)5301（代表）

編集後記

1994年に高瀬山遺跡の調査に着手してから早5年の歳月が過ぎ，この間に様々な新発見がありました。そして10月23日には山形自動道寒河江－西川IC間に寒河江サービスエリアが開設され，利用者の便が一層はかられました。（郊）